

昭和四十八年七月三十一日

第五七回 史蹟めぐり

大相模真大山大聖寺(不動様)

越谷市郷土研究会

大相模真大山大聖寺（不動様）

縁起を史実と照応しながら眺めると次のようである。武州大相模不動明王瑞像記によれば古来伝えられた縁起があつたが寛文中十余年を浜島（みま）したので人伝にていうには、良弁が相州大山で不動明王一尺七寸の像を刻んだ。侍者に背負わせてこの地までくると急に重くなつたので「有縁の地」とした。又云う「不動明王は根元二体を刻んだものである。延喜年中この地に一異翁あつて毎日元荒川の水で沐浴し不動明王を崇敬していたので、不動翁といわれていた。相州大山に参詣すること年に十数回。一朝山伏がきていうには「持つてきたこの像は相州大山で良弁が刻まれたものだ」といつて忽然と消えた。翁はこゝで、一字を造つて像を安置した。又外聞では翁が相州大山に参詣の帰途山中にて人のうめき声にあつたので草むらを分け入つたところ一体の像があつたのでこれを持帰り安置したという。いづれにしても御本尊不動明王については伝説的ではあるが、昭和七年、文部省嘱託福村垣元氏らが拜した感想によれば「良弁の作とはいへ、難きも同時代のものとみても差支えないだろう」記録では良弁は大山以東には来ていないことになつてゐる。

天文の初め或者が御本尊を盗み武江某の家に宿したところ、家屋鳴動して止まず、驚き急ぎ像を返した。その後変事あれば鳴動することから家鳴不動といわれるようになった。天文、弘治、永祿、元亀の間、岩付城主太田資正及び北条氏繁崇信し資施して厄除けにされたことは元龜三年二月の氏繁の定、によつて明らかで

あり奥方が参詣都度使用した珠数が保存されている。

(別表)

武州大相模不動明王瑞像記
武州崎玉郡大相模郡奥
河内守正徳公三津場之
手記一巻云々又等々餘略
源文心内伝等曾讀古
北条氏繁の定(別表)

大相模不動明王瑞像記と その巻末(別表)
武州大相模不動明王瑞像記
武州崎玉郡大相模郡奥
河内守正徳公三津場之
手記一巻云々又等々餘略
源文心内伝等曾讀古

北条氏繁の定(別表)
右大相模不動院
新田氏より除
合掌堂と
慶長五年六月
徳川家康

天正十二年 沙門定伝(紀州の根来寺性盛法師の弟子)はこの寺を立派にして伽藍を増築した。恐らくこの時、七堂伽藍が整つたと思われる。

家康が遊獵の折定伝は家鳴不動の話をしたところ、いたく感激して水田六拾石を与え、大聖寺と号した。これは家康入国の翌年にして天正十九年十一月である。この時を同じうして県内の神社仏閣に領地を寄進しているがその数は神社に比して寺院が遙かに多く百九ヶ寺に達した。近郷の十石以上の主な寺院

- 六拾石 新義真言宗 天聖寺不動堂 西方村
- 十五石 浄土宗 天嶽寺 越ヶ谷
- 十石 浄土宗 浄音寺 見田方村

又江戸城の方角からすると鬼門にあたるところから、僧六口、を与えた。即ち末寺のことである。次の五寺が近年まであつた。安養院(大正六年境内に移転し現在は権禪となる)福寿院(明治四十二年合併)智将院 利将院 東光院(竊寺)慶長五年六月徳川家康

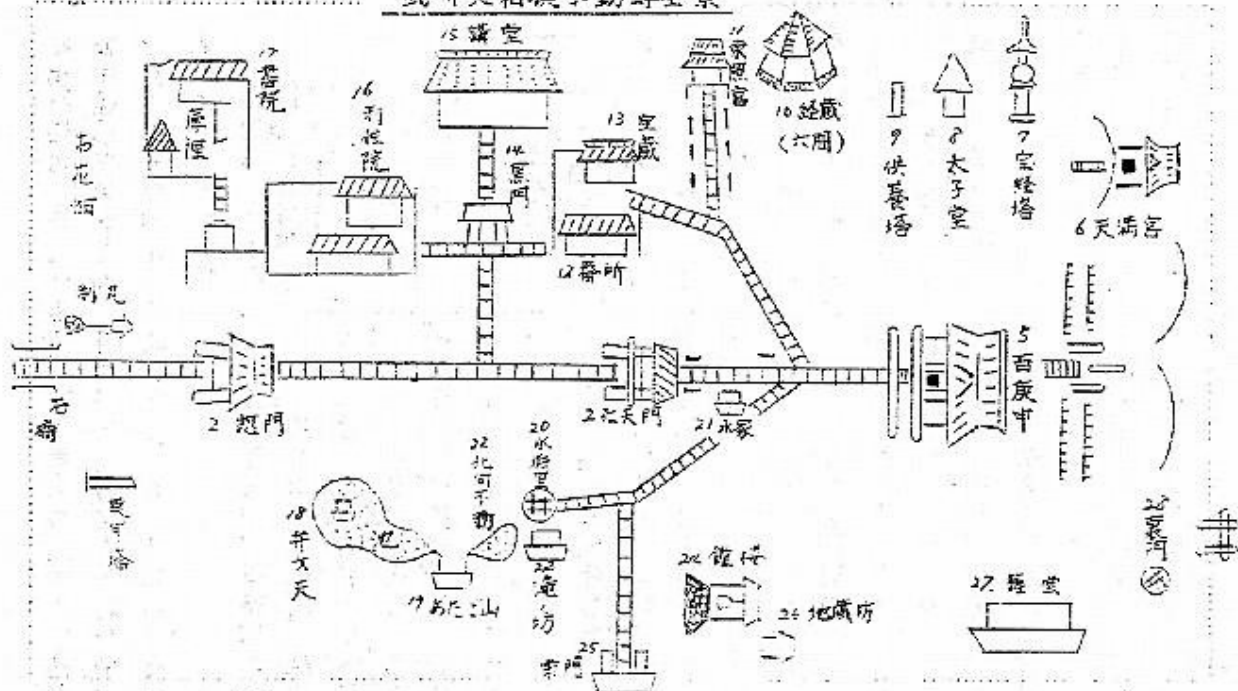
は下野小山に上杉景勝を改めていた時に、石田三成近江に兵を率ぐ。との江戸の便りに接し即刻江戸へ帰らんとしたが風雨強く当寺に宿した。家康は一刀を献じて戦勝祈願され、刀を立て刀がゴマ檀から西に倒れれば西軍（石田）の負け東に倒れれば東軍（徳川）の負けとしたところ刀は西に倒れたその時は甲冑の触れ合う音、賊の退散する足音がしたという。後にこの刀を寺宝として東照宮建立の際御神体とした。かくして慶長五年秋九月十有五日家康は関ヶ原の戦いで大勝を収めた。この以後當時では秋九年四日が大祭とし相撲を催すならわしとした。尚御開帳は酉年としている。享保二年講堂房舎火災にあいなかなか消えないので僧達元が本尊に祈願したところ風起り勿ち火は消えた。よつて金を広く信者からつりのり仁天門を作り持国多聞二天王をまつつた。

文化年間僧英山は伽藍を大修繕し水垢里のための井戸を掘つたが水が出ないので御本尊にお願いしたところ勿ち水が噴き出し大震災まで沐浴のために使われていた。

以上は瑞像記とこれが裏づけの史実であるが本寺の創建はいつ頃か、口伝によれば天平勝宝二年といふ當時は不動坊と称し次いで不動院大聖寺と称するようになった。緯は延暦年間に結造したと既されてあつたことから推則すれば奈良後期から平安初期といふことで果たして当時この地区は陸地として人が住めたか風土記によれば当時海又は沼沢にして五百年近くかかつて陸地となつたと記されているが後記の四条や別府の名の起りと関連して考察すると非常に興味のある問題だといえよう。

こゝで明治二十六年六月十六日晚の火災（原因については二説ないし三説ある。）でその殆んどを焼滅してしまつた當時の全貌

式州大相模不動尊全景



- 数字は解説番号
- 梵香積
- 瓦葺 茶店 大木を除く。(河内町の項参照)
- 道は光明行

- 建物の大きさは正確ならず。
- 境内の道辺及び西、北は大木を交えたうっせうたる森林。

を見よう。戦災前の茂草觀音様に勝るとも劣らない規模、西新井大師をして、せめて大相模不動様なみに参詣客があれば、とまげかわし、更に整くべし火災後の灰を買った海宝龜太郎氏（茂草の金屬商）をして、元荒川で灰を流して集めた金物で、二万円、をもうけたと豪語させた七堂伽藍はどんなであつたらうか。

1 制札、寛保四年に設けたもので石垣の上に立てたものである。制札とは高札禁札ともいふ禁止事項を広く民衆に告示することを目的とし多く下知状の様式をとつていた、文書は証明書であり、実際は木札に書いて寺社の門前や人の集る場所に掲げたものである。室町中期から幕府の発した禁札（制札）は書式が大体一定して来ており江戸時代の禁札は三ヶ条に限定されている。これより先当寺には次の禁制がきいてるのでそれを書いてあつた。

禁制

- 一 喧嘩口論之事
- 一 押賣狼藉之事
- 一 傳戲情變之事

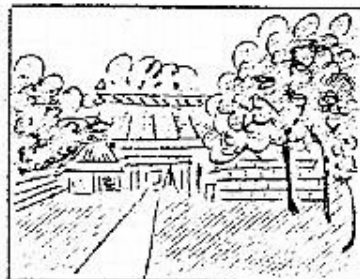
天正十四年正月十八日

福島又八郎

大相模不動坊

2、惣門 不動坊といわれた初期には小さな門であつたと思われ、が記録がない。当時廿三世の住木食戒円師が十万の僧者の助成を得て文化元年十二月瓦葺壯大を総門を建立した。後嘉永元年（四十五年経過）に大破したので三十世信剛比丘広く有志に再興し屋根を銅板葺にし永世不朽と思いの外明治十三年（三十四年経過）

に再び損破したので西方、東方見田方三村の信徒同盟五十余名一致相議し銀萬世話方の尋力で八方有信の淨財を納得し明治十七年に至り修繕銅板葺が落成したのである。額字、真大山、は白河桑翁の筆である。



(仁天門)

が宝石であるといわれていたので太助坊（俗に乞食坊主といわれる人々が食客として多数宿泊していた中の一人）は火中に飛びこんだが遂に焼死してしまつた。

4、本堂、湖山の始は天平勝宝二年といわれ始め不動坊次いで不動院大聖寺と呼び名が変るにつれ本堂の規模も順に壮大さを加えていつた。本尊は良弁作といわれる一尺七寸の白木像で秘仏として人に示さなかつた。この前に知証の刻んだ一尺三寸の立像を安置した。明治二十六年六月十六日折からの南風に本堂回廊下附近より発火し三日三晩焼え続けた結果さしもの大建築も土台石のみを残して灰となつた。火災の原因について二、三の説あるも何れも確定的でない。大木で本堂は焼け後半分のいたましい姿で生き残っていたことは今では桶のみとなつてしまつた。

さてこの火災で疑問となるのは本尊のことであるが出火と同時に

3 仁天門 享保四年頃建立、屋根は茅葺で両側に持国、毘沙門の二天像を安置した。階上に十六羅漢あり口廊をめぐらす、明治二十二年十月九日、町内（門前町を称す）の山崎湯屋（銭湯）より火災を生じ近所十七軒を焼きつくし更に飛び火によつて仁天門の茅屋根に火が移り全焼した。この時仏像の眼

に或る人（死亡した）が廚子を開けると小さい仏像一休しかをか
つたのでこれが本尊であろうと云われた。しかしこの時御本尊は
他にあつたので難を逃れたのは不幸中の幸であつた。加藤前任職
が大正十二年に再建すべく昔の姿を再現した設計図を作りこの計
画は九月三十一日に許可がありたが翌日大震災にかい取止めとな
つてしまつた。見積価格十六万円。

5、百重甲（兼甲講と百万遍の頂参照）焼失前の本堂より真北五
間離れて中央に一丈余の庚申塔それより左右に二段づつ百庚申を
並べてあつた。明治四十三年の水害で其の元荒川土手に土俵かわ
りに用いた後散在したものを集め現在は東門西側に並んである。
6、天満宮 現在裏山でもつとも高く三米はある丘がある此処に
石段を登つて天満宮があつた。

7、宝篋塔 諸寺に多く見られる大きな石塔がある。現在一米ば
かりの石垣がある。その上に建つていたものを火災後現本堂東裏
にかたしてある。

8、太子堂 聖徳太子を祝つてある。

9、供養塔 詳細ならず

10、経蔵 六角堂（法隆寺夢殿と同形）にして一切教（仏教典
籍の総集で恐らく天海蔵黄壁版による木板刷と思ふ）を収めた。

11、東照宮 慶長五年六月上杉景勝征討の折家康が立寄つて不動
堂に太刀を納めし縁故によりその太刀を神体として東照宮祠が建
てられ延宝六年六月将軍家綱より当時親如が拜領金を得て宮祠を
再建し新たに木像を彫刻して安置した、太刀は菱の紋の袋に納つ
ていて無銘である。

12、番所、寺内の火災、盗難等の整備時所

13、宝蔵 寺宝の倉庫である。火災の時多数運び出し惣門東側に
置いたが多数散逸（保管の名目で）してしまつた。

14、黒門 黒塗りのためこの名あり 火災をまぬかれた現在庫裡
に通ずる赤居根の門。

15、講堂 本堂に次ぐ大建築で数百人収容できた。

16、利性院 大聖寺の末寺

17、書院並びに庫裡

18、美女靴子（弁天様のこと）今も池中にあり

19、愛宕山

20、水垢理井戸 文化年間に通り水が噴き出ていた。震災で枯れ
て古井戸同然。

21、水家 手洗水で水垢里井戸の水を使用。

22、滝ノ坊 断食堂ともいわれ水垢里井戸で寄戒沐浴した後この
坊で修業した。

23、北向不動 三仏にて井戸を上から見下し北向のためこの名あ
り。

24、鐘樓 大平洋戦争で鑄造二百年以内の鐘は供出を命ぜられた。
本寺の場合は鐘の銘によれば延暦年間に鑄造したものを昭和三年
（今で一九四年前）に再鑄造したとあるため供出させられた。

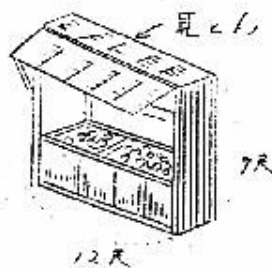
昭和三年再鑄造の時にはその前何年かに渡つて参詣者の身の裝飾
品を寄附させそれらと共に鑄たものである。尚鐘はその土地で鑄
造する慣習であつて本寺の場合も境内に多量の炭が埋受してある
箇処がその鑄造現場と思われる。

何故か見田方の浄音寺の鐘も昭和三年であつた。

25、東門 火災をまぬかれた、門前より吉川道へ続く。

これを称して地獄の一丁目とあだ名されていた。今日これら女中さんの数人は近在に嫁つき幸福に子や孫につきそわれている。

トコ店とは人が住まない出店にて夜は見どんを閉ざし昼は見どんを上げてヒサンとした。日用、小間物装身、化粧等売り不動様へ行けば殆んど品物が間に合つたという八軒から十二軒あり一間の大きさは九尺×十二尺で次の人達が出店をもつていた。



- | | |
|-------|-----|
| 向 浜 | 横 川 |
| 向 畑 | 染 谷 |
| 一 丁 目 | 会 田 |
| 増 林 | 尾 川 |
| 増 林 | 染 谷 |
| 瓦 曾 根 | 松 沢 |
| 大 相 模 | 田 村 |
| 越 谷 | 吉 沢 |

さしも栄えた門前町も明治二十二年十月九日の山崎湯屋からの出火で十七軒炎上したがその後復興し昭和四年の今度はせんべい屋からの出火で又も七軒を焼き、その後だんだんと離散する者多く今日の如き重微を来たしたのであるが今日でも大祭には帰つてきて露店を出す人もある、特に南の門前町は殆んど寺領地にして均等割で貸していたもので収入がなくなると寺に行けば何とか食わしてもらえろということ、すべての経済は寺につながつていた。